



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

# 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3740 号 2017.6.26 発行

## 2分の1成人式、誰のためにある？

朝日新聞 2017年6月26日

10歳を祝う学校行事「2分の1成人式」が広がっていることを5月、生活面の記事で紹介しました。さまざまな家庭事情に配慮されていないことにも触れた記事に、子ども、保護者それぞれの立場からつらかった体験談や、意見が多く届きました＝図参照。そこで考えたいと思います。2分の1成人式はだれのためにあるのでしょうか。

### ■感動の言葉浮かばず

「いまでも思い出すのは、抱き合っていて泣いたり、ほほえみ合ったりする親子の中で、一人ぽつんと、どうすればいいのか分からずにいたあの瞬間です」。都内の高校に通う女性（18）は、2分の1成人式をそう振り返ります。

幼い時から、すぐに手を上げる父親でした。裸にされてたたかれたり、投げられたり。決まって母親がいない時で、助けを求めることもできません。母親は機嫌が悪いと「産まなきゃよかった」「早く出て行け」と言いました。親は「恐怖の対象」でしかありませんでした。

式のために感謝の手紙を書く授業。周りはどんどん筆が進み「書けたー」という声があちこちから聞こえてきます。「『ありがとう』って、何を？ みんな何を書いているの？」。必死で考えましたが、思い浮かびません。とはいえ、ウソを書くのは、いやだ。ひねり出した「習い事、ありがとう」などに、先生からは「もっと真面目に書きなさい」

式に参加して思う	それぞれの立場で
<p><b>【当事者】</b> 10歳の子供が親に対して感謝の手紙を書き、それを教師に見せるというのはなかなか苦痛を伴う。実際に苦痛を感じているクラスメートを何人も見ました</p> <p><b>【親】</b> 感動して涙している保護者もいたが、数名、「あれ、やらせだよ」と言っている方もいました。共感しました</p> <p><b>【親】</b> 特に全員が仲が良いわけでもないまま同じクラスにいるという人々の前で、なぜ、子供が親への感謝の手紙を読んで、親が子供へのメッセージを読む必要があるのか？と疑問だった</p>	<p><b>【親】</b> 感動を押し付けられ、自己開示を強要されているようで、不愉快極まりない</p> <p><b>【親】</b> たかだか10年育てられたくらいで、感謝の作文書かされる子供もいろいろ迷惑</p> <p><b>【虐待されていた人】</b> 虐待を受けている子どもにとっては、うその自白を強要される行事だ</p> <p><b>【不明】</b> 成人式のようなお祝いではなく、子供が親をもてなす儀式になっていて、それを学校や自治体が推進しているのが気持ち悪い</p>

### 動画「家族にありがとうがしんどい子どもたちがいます」

虐待を受けている子どもが、学校で家族への感謝の気持ちなどを発表することになり、苦痛する様子を描いている

精神障害の親やその子どもを支援するNPO法人「ぶるずあるは」(さいたま市)が作成し、ユーチューブに投稿したものの

と、2、3回書き直しを指示されました。

当日は、それぞれ自分の親の前で手紙を読むことになっていました。母親がどんな反応をするかびくびくしていると、周りには泣いている親や、その親に抱きついて泣く友だちも。「何してんの?」。わけが分かりませんでした。そして、そうできない自分は他人と違うのだと、初めて感じました。

小学校と中学校の卒業式でも「親への感謝」を書かされました。先生たちは、感動させようと必死に演出していました。しらしさしか感じなかったと言います。

高校に入ると、一時は児童相談所の一時保護所で過ごしました。自傷が直らず、ひっかいてしまったりたたいてしまったりして、体のあちこちに傷があります。母親から「あてつけか」と言われている傷です。いまは、一日も早い自立を目指しています。

「なぜ親を関わらせたり、『感謝』にこだわったりしちゃうんでしょうか」。今も疑問です。

都内の女性(24)にとっても、つらい思い出です。小さい頃に母親が亡くなり、その後は祖父母の家や父親の再婚相手とその子どもと暮らしていました。再婚相手は「お母さん」と呼ぶことを許さず、ちょっとしたことで部屋のドアを蹴飛ばしたり、金切り声で怒鳴ったりしました。お気に入りのぬいぐるみのおなかを切られたり、「臭いから一緒にするな」と言われ、洗濯物は別にして自分で洗ったり。それでも「自分が悪いんだ」と思い、諦めていました。

式には、子から親への感謝の発表がありました。みんなで丸くなり、真ん中に出て発表します。女性の親は来ていませんでした。発表が始まると、抱き合う親子や、涙を見せる親がいました。「みんな幸せなんだ」。自分の番が回ってきて手紙を読み始めると、ぼろぼろと涙が出てきました。「なんで私にはお母さんがいないんだろう」「誰にありがとうって言ってるんだろう」。友だちにしがみついて、泣きました。

「周囲から見れば、うちは裕福な『いいおうち』。でも、中身はそうではない。家の中がどうかなんて、外からみても、わからないんです」

#### ■親の感動、優先?

感謝される側にも、色々な事情があるようです。

東京都杉並区の女性(45)は長男の入学前に離婚。その後、別れた夫と交流はありませんでした。5年前に2分の1成人式の準備のために、小さい頃の写真と、その写真のエピソードを聞いてくるという宿題が出されました。普段は見ないアルバムを開かざるを得ませんでした。

長男は「お父さんだね」などと言いながらアルバムをめくり、「なんで離婚したの?」。夜中まで説明しました。いずれ説明しようとは考えていましたが、「自分のタイミングで話そうと思っていたのに——」。不満が残りました。

当日はオルゴールのBGMが流れる中、親から募った子どもへのメッセージを先生が読み上げました。「泣け」と言われている——。そう感じてしらけていると、隣の母親は感涙。異様な雰囲気だったと言います。「学校は『親を感動させました』と言いたいのでしょうか。うすうすやりにくい家庭があると気づいているのに、感動を優先させている気がしました」

子育てに悩む親もいます。埼玉県的女性(41)は、長女の2分の1成人式の日学校を休ませました。子どもが幼い頃から、ちょっとしたことですぐにいらいらして、子どもを怒ってしまいます。わがまを言ったり、はしゃいだり、騒いだりする子どもに、うるさいと感じていました。「子どもらしい」と分かっているのに。甘えられても、かわいいと思えません。「そんな自分が、許せない」。ずっと悩んできました。

式は、子どもから親への手紙を読むという内容でした。「私に書くことなんてないんじゃないか」「書きたくないのに、無理やり書かされたんじゃないか」。不安が募りました。感動できない自分や、感動している周囲を想像するのも、気が重い。前日に長女が発熱したのを口実に、当日は学校を休ませました。

次女は今年度が4年生です。「私のような普通に見える親でも複雑だということは、先生

に言わないと分かってもらえない」。勇気を出して、担任にやり方を変えてもらうよう要望するつもりです。

実際に学校に意見して、内容を変えてもらった人もいます。

千葉県四街道市の女性（75）は、孫の女兒と一緒に暮らしていました。3歳だったその子を残して、娘は病気で亡くなりました。

孫が3年生の1月、「学校だより」に2分の1成人式の様子が載っていました。親に感謝する行事で、校長は称賛しています。「こんな行事があるなんて!」。すぐに夫に相談しました。

担任に手紙を書きました。なぜあえて、みんなの前で感謝を読み上げるのか。なぜわざわざ、母親がいないことを発表しなければいけないのか。そんな疑問をぶつけ「やり方を考えて欲しい」と訴えました。すると、渡したその日の夜に、担任から「私も本当は反対です」と電話がありました。4年生の担任とも話し合い、「前向きで、すべての子どもが同じ立場でできる内容に」と要望しました。その結果、将来のことを発表する会になったそうです。担任からは「熱心な先生もいて、教師同士ではおかしいと言にくい。保護者から言ってもらえたので、対応できました」と言われたそうです。

#### ■配慮不足に警鐘鳴らす活動も

2分の1成人式が持つ危うさを主張している人たちもいます。

さいたま市で精神障害を持つ親とその子どもを支援するNPO法人「ぶるすあるは」は2年前、1本の動画をつくり、ユーチューブにアップしました。タイトルは「家族にありがとうがしんどい子どもたちがいます」。親から虐待を受けている子どもが、学校で「家族への感謝の手紙」などの宿題を出され、苦悩する様子をイラストで描いています。

作成のきっかけは、2分の1成人式の盛り上がりや、家族を美化する風潮に疑問を抱いたことでした。ツイッターでは、「これはつらいね」「知らないだけで身近にいるかも」などの反応がありました。

イラストを担当する細尾ちあきさんは「学校の行事から、子どもたちは逃げられません。家族を『いい』と思えない親や子どもたちは、より追いつめられ、誰にも話せないと感じてしまうでしょう」と話しています。

養子縁組などの親子にとっては、どうでしょうか。

埼玉県内の里親らが集まる「埼玉里母の会」は1年前、里親ら100人ほどにアンケートをとりました。内容は、2分の1成人式と、小2の生活科で実施される生い立ちを振り返る授業について。どちらも家族や生まれた時のことなどに触れるケースが多く、里親たちが頭を悩ませていたといいます。

アンケートには、おなかにいた時や赤ちゃんの時の様子などを聞かれて、心を痛めたという声が寄せられました。結果は今後、教育関係者の理解を求める活動につなげる予定です。「いろいろな家庭があることに、もっと配慮してもらうきっかけにしたい」と担当者は話しています。

「複雑な家庭の子がいる時は配慮している」「保護者から意見があれば内容を変える」。この取材で耳にした、学校の対応です。でも、家庭の状況は外からは分かりません。「家族」や「感謝」をテーマにした行事には、異を唱えにくいでしょう。声を上げられない保護者もいます。生活面の記事には、メールや手紙など150の意見が寄せられました。ほとんどが、つらい体験や違和感を書いたものでした。押し殺してきた思いが、集まったのだと感じました。(田中聡子)

#### インスリン注射「トイレで打って」 理解進まぬ教育現場 石塚翔子

朝日新聞 2017年6月25日

希少なタイプの糖尿病を患う愛知県の男子高校生は、体調管理のために必要な昼食前のインスリンの自己注射を教室で打つことが一時期かなわなかった。中学や高校側が禁じた

ためだ。トイレで打つよう指示されたこともあり、問題視した医師が先月学会の集会で報告。患者団体は、本人の希望を尊重すべきだと指摘している。

愛知県の県立高校の男子生徒（16）は、名古屋市内の中学2年生だった2014年12月、病院で1型糖尿病と診断された。インスリンが膵臓（すいぞう）で作られない病気で、生活習慣と関係のある2型と異なり、自分の免疫が誤って膵臓の細胞を攻撃することなどで起こる。15歳未満の年間発症率は10万人に2・25人とされる。

高血糖が続くと将来腎不全や失明などの合併症が起こる恐れがあり、1日4、5回、注射などでインスリンを補い、血糖値を調節することが欠かせない。生徒は学校に事情を説明し、危なくないと考えて昼食前に教室で打つことにした。他の生徒も理解してくれた。

だが、中学3年生になると新しい担任教諭から教室での注射を禁じられた。「トイレで打って」と言われたこともある。生徒はトイレはいやだと訴え、保健室で打つことになった。当時の教頭によると、学校側は安全で衛生的な場所として保健室がいいと判断したという。生徒は「隠れるようにして注射はしたくない」と思い、学校での注射を黙ってやめてしまった。

男子生徒が使っていたペン型のインスリン注射器。出ている針の長さは4ミリ程度。注射は1、2分で終わるという



事情を知った母親（46）が注射は危なくないと学校側に説明。



主治医は学校に出した診断書に「注射は生命の維持に不可欠。場所を限定しないよう配慮を求め」と付記、市教委にも相談したが事態は改善しなかった。当時の教頭は取材に「今思えば注射と聞いて構えてしまい（本人やほかの生徒の）安全を考え過ぎた面もあるかもしれない。もっと本人の思いを聞いてあげたら良かった」と語った。

**てんかん薬成分も原料変更 風邪薬水増しのメーカー** 朝日新聞 2017年6月26日

多くの風邪薬で使われているアセトアミノフェン（AA）に安価な中国製AAを無届けで混入させていた原薬メーカー「山本化学工業」（和歌山市）が、てんかん発作の治療薬に使われる「ゾニサミド」の製造でも混ぜる薬剤を無届けで変更していたことが同社関係者の話でわかった。厚生労働省の立ち入り調査でもこうした事実が確認されている。

山本化学は、AAとは別の原薬でも無届けで製造過程を変更していたことになり、薬の安全性を軽視する体質が浮かんた。

ゾニサミドはパーキンソン病の治療薬としても使われている。関係者によると、ゾニサミドは複数の原料を混ぜ合わせてつくるが、山本化学は数年前に、原料を混ぜりやすくするための薬剤を変更した。

**1歳児のおかずは「スプーン1杯」母悲痛、ケチケチ給食で体重増えない… “ブラックこども園”の劣悪** 産経新聞 2017年6月26日

兵庫県姫路市の「わんずまご一保育園」が定員を超過した園児を受け入れ、劣悪な給食を提供していたことが判明してから、3カ月余りが過ぎた。その間、同園は全国で初めて認定こども園としての認定を取り消され、休園に追い込まれたが、その余波はいまだ収ま



っていない。姫路市は保護者からの強い要望を受け、6月に入り、子供たちの発育や健康への過少給食の影響に関する調査を開始した。ずさんな運営を見逃していた市への批判は根強く、待機児童の解消が急務となる中、自治体には保育の「量」だけでなく、「質」も確保する必要性が突きつけられた格好だ。



「わんすまぎ一保育園」で2月23日、2歳児に出された給食。当日は73人の子供に対し、用意していたのは42食分だった(兵庫県姫路市提供)

発育への影響は？

「今は順調に体重が増えるようになり、ほっとしています。それだけに、全然増えなかった時期が子供の将来に影響しないか心配で…」3月まで2歳の次男を同園に預けていた母親は、複雑な表情をみせた。

次男は別の園に通わせていた長男と比べると発育が遅く、母親はわんすまぎ一保育園とやりとりしていた連絡帳に、次男の体重が増えない悩みを書きつづっていた。

《11kgの壁高し！！ 身長は高くなっていくのに、体重は変わりません》

《食ベムラがあり、WT（ウェイト＝体重）が増えないこともあって心配しています。給食はどうでしょうか》

保育士からはその都度、給食をしっかり食べているという返事が書き込まれていた。

「家に帰ったらたくさんご飯を食べたがるので、不思議には思っていた。でも、まさかあんな給食を与えているなんて、想像もできなかった」

こうした保護者の不安を受け、姫路市は6月、平成27年4月以降に同園に通っていた0～5歳の園児93人の保護者ら79世帯を対象に、不適切な給食提供による発育や健康への影響の有無を把握するための調査を始めた。調査結果は7月上旬にもまとめる予定で、担当者は「得られたデータを分析し、今後の対策に生かしたい」としている。

母親は「園長に対しては腹立たしい思いしかないが、市にも子供の発育や健康に影響がなかったかどうか、徹底的に明らかにしてもらいたい」と話した。

40人を10食分でまかなう

わんすまぎ一保育園は、短大卒業後に民間企業や託児所に勤務していた小幡育子園長により、平成15年11月、認可外保育施設として設立された。27年3月には認定こども園となり、国や県、市から年間計5千万円の給付金も受け、順調に運営されているはずだった。

だが、実態はずさん極まりなかった。

28年度の園の定員は46人。だが、実際には市を通さずに保護者と直接契約したり、不正に一時保育を行ったりして、定員を5割以上も上回る園児を預かっていた。

にもかかわらず、外部の業者に注文する給食は定員分だけだった。県や市の特別監査で問題が発覚した2月23日当日には73人の子供に対し、用意していた給食は42食分。それを分け与えると、1歳児のおかずはスプーン1杯ほどにしかならなかった。それどころか土曜日には40人前後の給食を10食分でまかなうことすらあった。

電気代を気にしたのか、冷暖房も最小限。冬にもかかわらずエアコンの電源が抜かれ、室温が14度しかない部屋もあった。

劣悪な環境に置かれていたのは、園児だけではなく、働く保育士たちも同様だった。

園は無届けで夜間のベビーシッターや学童保育も行っていたが、掛け持ちをさせられた保育士は無給。そもそも保育士の数が運営基準に足りず、市には3人水増しして届け出ていた。

園児にとっても保育士にとっても、「ブラックこども園」そのものだったのだ。

性善説で虚偽申請見抜けず

なぜ、このような運営がまかり通ったのか。

「行政が待機児童問題の解決を急ぐあまり施設を増やすことに気をとられ、質の担保がおろそかになった部分があったのではないか」。こう指摘するのは、大阪教育大の小崎恭弘准教授（保育学）だ。

認定こども園は待機児童解消と幼児教育・保育の充実を目指して18年10月に創設された制度だ。幼稚園と保育所の機能を併せ持ち、保護者が働いているかどうかにかかわらず、就学前の子供を受け入れる。27年4月には内閣府の旗振りで「子ども・子育て支援新制度」が始まり、もともと認可を得ていた幼稚園や保育所が相次いで認定こども園となった。

28年4月現在で全国に4001カ所あり、このうち兵庫県では8%にあたる322カ所が運営されている。376カ所の大阪府に次いで全国2位だ。

それでも、わんずまぎ一保育園のように認可外保育施設から認定こども園へと移行したのは7カ所しかない。一般的に、もともと幼稚園や保育所として認可されていた施設が認定を受けるのに比べ、面積や職員数などクリアすべきハードルが高いとされる。だが、わんずまぎ一保育園は認定を申請する際から、実態を偽った書類を姫路市に提出していた。

「申請時から嘘をつくことは想定していなかった」。県と市の担当者はいずれも、認定の審査が「性善説」に基づいていたことを認めている。

「人手不足」と監査怠る

認定を与えた後の運営状況のチェックもずさんだった。

国は認可外保育施設から移行した認定こども園に対し、原則として年1回以上、職員数や園児の定員などの監査を実施するよう指導していた。ところが姫路市は「人員に限られている」ことを理由に、認定から2年近くたっても一度も定期監査を行っていなかった。

「あその園は、市の許可がなくても子供が入れるんか」。昨年1月にそんな匿名の情報提供があったが、園長は否定。今年2月2日に監査に入ったときも、定員外の児童は確認されなかった。園長が「きょうは監査の日だから来ないように」と保護者に連絡していたからだ。

それでも一部書類に不審な点があり、23日に県と抜き打ちの特別監査を実施。ようやく、定員超過や給食の過少提供などの問題点が発覚した。

第三者のチェック必要

保育の現場での不正はわんずまぎ一保育園に限ったことではない。

京都市伏見区の認可保育園では26年6月、女性職員が男児をほうり投げて頭蓋骨を折る重傷を負わせた。女性職員は保育士の資格を持っていなかった。茨城県取手市の認可保育園では園児への虐待類似行為やずさんな会計処理が明らかになり、28年3月で運営法人が交代する事態に。横浜市の認可保育所では今年4月、土曜日に給食を提供していないにもかかわらず、市には虚偽の報告をして給食費を不正受給していたことが発覚した。

小崎准教授は「施設数が増加していく過程で、保育への意識が低い施設が出てくることには半ば必然的な面もある」とした上で、「行政には認可を出して終わりではなく、その後のフォローも求められるが、監査だけでは十分ではない。より実態に踏み込んだ部分までチェックしようとするならば、保育経験者や学識経験者らによる第三者評価制度を導入することも必要となるのではないか」と提言している。

## 保育士の精神ケア必要3割 6割で支援体制整わず 厚労省、全国施設調査

産経新聞 2017年6月25日

待機児童解消に向け保育士の確保が課題となる中、全国の保育所や認定こども園のうち、精神的ケアが必要な保育士がいる施設が27%に上ることが25日、厚生労働省研究班の調査で分かった。全体の58%で相談窓口やストレスチェックなどのサポート体制が整っておらず、公立施設に比べ民間で対応の遅れが目立った。

政府は「平成32年度末までに待機児童ゼロ」との新たな目標を掲げ、保育の受け皿を

大幅に拡充する方針。保育士は小さな子供の安全を守る心理的重圧や、保護者を含む人間関係での悩みを抱えやすく、賃金などの待遇改善とともに心のケアが急務だ。

調査は今年2～3月に実施。全国の保育所（認可外を含む）や認定こども園など約1万の施設を無作為抽出し、2672施設から回答を得た。

施設責任者への質問で「精神的、心理的負担のサポートが必要と感じたり、実際に治療を受けたりした保育士がいる」と答えたのは719施設（27%）だった。

## 中核市65%、児相設置せず 財源・人材確保が壁に 虐待対応で厚労省調査

産経新聞 2017年6月26日

児童相談所を設置していない全国46の中核市（人口20万人以上）のうち、65%に当たる30市が「今後、児相の新設を検討していない」と答えたことが26日、厚生労働省の調査で分かった。平成16年の法改正で中核市も児相の設置が可能となったが、調査では、財源や人材の確保への懸念が大きな壁となっている現状が浮き彫りになった。

児童福祉法は、都道府県と政令市に児相の設置を義務付け、中核市による設置も認めている。ただ中核市では金沢、横須賀の2市しか設置しておらず、今年4月施行の改正法では、中核市と東京23区に関し、5年をめどに児相が設置できるよう政府が必要な措置を講じると明記した。

厚労省は1月、48ある中核市を対象に児相設置に関する調査を実施。金沢、横須賀を除く46市では、30市が今後の設置を「検討していない」とし、「検討している」は11市にとどまった。5市は未回答。

検討していない理由（複数回答）では、「財政面、人材育成面での負担が大きく困難」が最多の16件。

## 【主張】児童虐待防止 情報共有さらなる一步を

産経新聞 2017年6月26日

深刻な児童虐待を防止するため、関係機関がようやく本腰を入れ始めた。虐待死ゼロへの一步になってほしい。

今月15日、埼玉県、さいたま市と県警が「情報共有等に関する協定書」を締結した。4月には大阪府警が全国初の専門部署である「児童虐待対策室」を新設した。

児童虐待の通報・相談は急増しており、児童相談所（児相）と警察の情報共有が悲劇を防ぐ。さらなる取り組みが必要だ。

大阪府警の対策室は先月、昨年12月から所在不明になっていた大阪府茨木市の生後8カ月の男児を名古屋市内で保護した。4カ月児健診を受診しなかったため、市が児相に通告。児相の求めに応じて、男児が身を寄せていた祖母が行方不明者届を府警に提出した。連携が実ったケースだ。

厚生労働省によると、全国208カ所の児相が平成27年度に対応した児童虐待の通報・相談は10万3286件で、初めて10万件を超えた。調査開始から25年連続で最多を更新している。

一方、全国の警察が昨年1年間に、虐待の疑いがあるとして児相に通告した18歳未満の子供の数は5万4227人に上った。前年比46・5%増で、こちらも12年連続の最多更新である

児相はこれまで、警察に知られたくないという相談者の意向やプライバシーなどを考慮し、警察への情報提供には消極的だった。

児相は人員不足から夜間や休日の対応ができず、家庭訪問しても立ち入りや児童との面会を拒否されることが少なくない。虐待を早期に発見し、防止するには警察との連携が不可欠だ。

埼玉県などと県警の協定書は、昨年1月、狭山市で起きた3歳女児の虐待死事件がきっかけ

かけになった。情報共有の動きは東京都、大阪府などでも広がっている。

しかし、警察に提供する情報は「事件になる可能性がある事案」などに限定するところも多く、実効性があるか疑問だ。

すべての情報を共有し、場合によっては一時的に子供を親から引き離して保護する必要がある。経験不足から子育てに悩む親への支援も欠かせない。

塩崎恭久厚労相は国会で「子供たちがすくすくと、健全な養育を受けながら育っていくことが大事」と答弁した。

その言葉を形にしてほしい。

## 社説 「毎日かあさん」卒業 いろんな家族を励ました 毎日新聞 2017年6月26日

かっぱう着姿の元気なお母さん、やんちゃでおませな2人の子ども。温かく、しみりさせられる漫画に癒やされた人は多いのではないか。

毎日新聞の連載漫画「毎日かあさん」が本日の回で終了した。

実の娘が独り立ちできる16歳になり、お母さん卒業（連載終了）を決めた作者の西原理恵子さんに、共感の便りが多数届いている。足かけ16年にわたり、ほぼ毎週、笑いと涙の子育て漫画を届けてくれた。

新聞漫画は時代を映す鏡である。毎日かあさんは既存の漫画とは相当に違っていた。世間の大ニュースは登場しない代わりに、今どきの働くお母さんの育児をリアルに描いた。

「母親の度量に感心しながら、ふと、私も育児を面白がってみてはと思ったら、心が軽くなりました」

「男の子のお母さんなら、誰でも一度は経験することがてんこ盛り。子育てに奮闘していた頃は宝です」

多くの人が、自分と重ね合わせて読んだ様子がうかがえる。

「お便りを読むと、完璧な家庭なんてないんだとつくづく思う。漫画を通じて励まし合えればいいな」と西原さんは語っている。

2002年、西原さんが37歳の時に連載を始めた当初は、絵が汚い、下品だという苦情がきた。

家族は観察の対象で、漫画自体はフィクションだ。それでも西原さんの子どもを傷つけないかと心配する向きも社内にはあった。

「お母さんの情報がハンパないんで、ちょっとでも話したらすぐ描かれますね」。息子は後にユーモアを交えて、編集者にそう話した。

転機になったのは、2歳の娘が涙をふきながら保育園で母の迎えを待つ「台所」という作品だった。共稼ぎの親から、感謝の声が相次いだ。子どもの成長を中心に離婚や元夫の死去も描き、新境地を切り開いた。

この間、文化庁メディア芸術祭賞や手塚治虫文化賞、日本漫画家協会賞を受賞。テレビアニメや映画にもなった。単行本の売り上げは累計約240万部を数える。

10月からは、中高年女性を題材にした西原さんの新連載が始まる。

『卒母（そつはは）』（子育て卒業）した同じ女性の悩みや第二の人生を描きたい。全国のファンと共に西原さんの次なる挑戦に期待したい。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

